【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	岐　阜　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	可児郡御嵩町兼山町中学校組合立共和中学校			ﾌﾛﾝﾃｨｱﾃｨｰﾁｬｰ	大前雅紀	
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	３	２	２	１	８	２２
生徒数	８１	６６	７８	１	２２６	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「生き生きと学ぶ生徒を育てる」
～個のつまずきをとらえ、個の特性を生かす授業づくり～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

学力向上フロンティア事業に全校体制、全教科、全職員で取り組み実践を進める。
少人数指導実施学年と教科
・２、３年生・数学
　１クラスの人数が多く、生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため。
　昨年度からの実施継続学年であるため（３年生）。
・２、３年生・理科
　１クラスの人数が多く、生徒の理解の状況に差が出やすい教科であるため。
　昨年度からの実施継続学年であるため。
・１年生・英語
　基礎・基本を着実に定着しておくことが大切であるため。
多人数指導実施学年と教科
・１年生・保健体育
　単クラスでは集団的な側面が育たないため、学年として集団を高め、伸ばすため。

(2)　年次ごとの計画

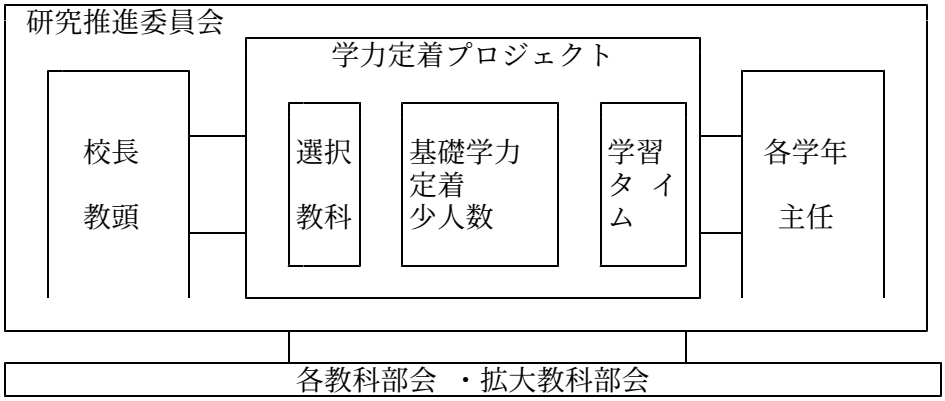
平成14年度	○テーマ　「生き生きと学ぶ生徒を育てる」 ～個のつまずきをとらえた授業づくり～ ○研究の見通し（仮説） 授業において、「わかったとき、できたとき」の表情から、生徒達の充実感や満足感を感じる。「確かな学力」を育てるために、集団の中で、「個の特性（＝つまずき）」を生かし、充実感や満足感につなげようと考えた。集団の中で共に学び、集団でこそ、つけることができる力に着目し、学習集団としての高まりを目指した授業を大切にしていく。その中で、生徒一人一人の特性を捉え「つまずき」を把握し、「つまずき」を克服していくための対応の在り方（手だて）を究明することが、個に応じたきめ細かな指導の充実につながり、基礎的・基本的な内容の確実な定着、「確かな学力」の向上につながると考えた。 Ｈ１４年度・・　教科の特性を生かした学び方に重点をおき、つまずきの把握と、その克服の手だてを考え、実践する。 Ｈ１５年度・・　学習過程の工夫に重点をおき、１４年度の実践に積み上げる。

	Ｈ１６年度・・　２年間の実践からさらに積み上げ、改善し、総合的に取り組む。 ○研究の内容・方法 ３つの研究の柱を立て、実践していく。 研究の柱１　教科の特性を生かした学び方 ・年間指導計画、単元指導計画、評価計画の工夫 教科における「基礎・基本」と「つけたい力」を明確にし、観点別評価規準を位置付けた年間指導計画、単元の構造化を図り、「つまずきと手だて」を盛り込んだ単元指導計画、評価と指導の一体化を図り、評価の場・方法」を明確にした評価計画の作成に取り組む。 研究の柱２　学習過程の工夫 ・授業の各段階での「一人ひとりの学びが深まる」工夫 導入段階の「課題の明確化」、追究段階の「かかわり合いの組織」、終末段階の「評価の在り方」について取り組む。 課題設定・教材開発の工夫　少人数指導の集団編制について 研究の柱３　学習集団づくり ・自ら学び合い高め合う学習集団 生徒の学びを生かす教室経営、お互いが高め合える学習集団づくり、お互いの考えを大切にする姿づくりについて取り組む。

平成15年度	○テーマ　「生き生きと学ぶ生徒を育てる」 ～個のつまずきをとらえ、個の特性を生かす授業づくり～ ○研究の見通し 生徒一人ひとりの特性を捉え、「つまずき」を把握し、「つまずき」を克服するための有効な手だてを差しのべ、（Ｃ）の生徒を（Ｂ）に高めることを目指した。また、どの生徒も伸ばそうと、集団の中での個の特性＝良さを生かす場を設けることや新しい視点を示すことで、（Ｂ）の生徒をさらに（Ａ）に高めようと考えた。 ○研究の内容・方法 ３つの研究の柱は、同じであるが、今年度重点を入れる「学習過程の工夫」を研究の柱２から１にした。また、少人数指導においては、集団の編制だけではなく、授業展開におけるより効果的な少人数指導について工夫した。

平成16年度	○テーマ　「生き生きと学ぶ生徒を育てる」 ～個のつまずきをとらえ、個の特性を生かす授業づくり～ ○研究の見通し 個をできるだけ正しくとらえること、どこにつまずいているのか（習熟度、学習のスピード、言語・想像力、興味・関心、生活経験の視点から）を見直し、自ら学ぶ力をつけるためには、教科の特性を生かし、学習内容をふまえ、より効果的な集団編制の在り方を工夫する。 ○研究の内容・方法 ３つの研究の柱を見直し、２年間の成果を踏まえ、より具体的に、客観的に「確かな学力」の検証をしていく。

(3)　研究推進体制



学力定着プロジェクトとして、選択教科、基礎学力定着、少人数、学習タイム担当の教師、学年主任で研究推進委員会を組織し、取り組んでいる。

時間割編成の工夫として、毎週水曜日の第６校時に「学習タイム」の時間を位置付け、学習内容における自分のつまずきを発見するとともに、つまずき克服のための手だてを考え実行する時間とする。国社数理英のつまずきの解消及び発展学習、読書、校長講話など、基礎学力の定着及び表現力の向上をめざしている。

また、選択教科の履修幅を拡大し、全学年で５教科の基礎コースを開設し基礎学力の向上に努めている。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

願う生徒の姿を意識して、全教科、全校体制で取り組んだことにより生徒のよい姿、頑張る姿がたくさん見られるようになった。

・クラスの中で積極的に発表できる雰囲気ができてきている。
・授業に落ち着いて取り組むことができている。
・授業後や、職員室にまできて質問する生徒が増えた。夏休みにも自主的に質問に来る生徒もいる。

これらの姿は、生徒の心の壁がとれてきて、自己を見つめる力がつき、自ら学ぶことができるようになってきているからだと考えられる。

（１）研究の柱１「学習課程の工夫」

○　どの教科においても、生徒のつまずきと手だて、さらに生徒の特性を事前に把握することによって、(昨年度より) 指導と評価の一体化を図り、見通しをもって基礎・基本の定着を目指したきめ細かな指導を実践することができた。

○　数学、理科では、単元導入時におけるＴＴ指導や均質集団、単元末における理解・習熟度別集団など、学習内容や生徒の実態に応じた集団編制の必要性・有効性をつかむことができてきた。

―　少人数指導での成果として　―

・３年生の実力テストでは、数学、理科の平均が全国平均を上回り、知識、理解の面でも成果が表れてきた。
・数学では、数学の楽しさを実感し、数学検定に意欲的に取り組む生徒が増えた。
・理科では、夏休みの一研究で理科を選択する生徒が、昨年度より増えた。
・授業改善のアンケートの結果や生徒の感想から、「仲間の発言から理解が深まりわかったことがあったか。」の問いに対して、予想していたより高い評価を得ることができた。また、予想をもち、取り組んでいくことにこだわった結果も高い評価を得た。授業の内容の理解度との相関関係もあると考えている。

（２）研究の柱２「教科の特性を生かした学び方」
○　全教科、全校体制で取り組み、どの教科においても、生徒のつまずきや特性をつかみ、その克服の手だてを単元指導計画に共通して位置付けることができた。
○　評価の重点化をはかり、単元でつけたい力をよりはっきりさせることができた。
（３）研究の柱３「学習集団づくり」
○　学習委員会を中心とし、生徒自身による授業姿勢の向上への働きかけができた。
○　昨年度より各教室や、学習室などの掲示や環境整備の充実を図ることができた。
○　聴く姿勢や、仲間の考えを大切にした授業展開が向上した。

２．今後の課題

（１）研究の柱１「学習課程の工夫」
▲　学習内容における集団編成と編成の在り方について、より効果的な方法を究明する。
▲　単元導入時の教材、終末における練習問題等の開発や整備を図り充実させていく。
（２）研究の柱２「教科の特性を生かした学び方」
▲　単位時間における観点別のねらいにせまるためのつまずきの要因をより明確にし、手立ての複線化を図り指導や援助の仕方を明らかにする。
単元指導計画、年間指導計画の改善に取り組んで、来年度へさらなる積み上げをしていきたい。
（３）研究の柱３「学習集団づくり」
▲　学習委員会や教科係の生徒による授業向上への働きかけ、高まりを作る。
▲　発言の仕方、学び方が、どの生徒にもわかる工夫、授業評価の工夫を向上させる。
来年度、今までの２年間の取り組みを踏まえ、本当に「確かな学力」の向上につながっているのか、自分で解決していく力・表現力を生徒の姿から具体的に検証をしていきたい。
そのためには、個をできるだけ正しくとらえること（習熟度、学習のスピード、言語・想像力、興味・関心、生活経験の視点から）を見直し、自ら学ぶ力をつけるためには、一緒の方が良いのか分けた方が良いのか仮説を立て、実施していきたい。学びの手だての一つとして少人数指導を有効的に活用していきたいと考えている。教科の特性を踏まえた学習の仕方、学級経営を基盤にした学習集団の高まりを大切にし最終年度へ向けて改善していきたい。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

・観点を明らかにした確認問題を行うことによりその学期の学習の達成状況を、把握している。
・各教科で単元毎の確認問題を行うことにより学習の達成状況をきめ細かく把握している。
・生徒、保護者へ向けてのアンケート調査を行っている。
・授業改善に役立てるアンケートを行っている（理科）。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

＊　研究会、説明会等の開催実績及び開催予定（日時、場所、対象、会の目的等）
開催実績
平成１５年　２月１４日（金）　可茂地区協議会
学力向上フロンティアスクール公表会
平成１５年１１月１０日（月）　可茂地区協議会
学力向上フロンティアスクール公表会
＊　研究成果普及のためのＨＰ作成、パンフレット作成等の実績（学校としての創意工夫を含む）及び今後の予定
・研究成果普及のためＨＰを作成した。今年度の成果を更新していく予定
・公表会において、指導案や研究の概要についての、冊子を作成した。
・来年の公表会では、さらに充実した（３年間の研究の成果）指導案、単元指導計画、研究の概要についての冊子等を作成する予定である。
＊　フロンティアティーチャーとしての研究成果普及のための活動実績又は予定
・御嵩小学校、伏見小学校と連携をとり、互いに授業を公開し、校内研究会へも参加し合うことで研究を深めている。また、坂祝中学校とも、互いに教科の授業を見合ったり、校内研究会へも参加し研究の成果などを交流している。
・可児郡教育研究会全体会で、共和中学校の研究の歩み、成果と課題、今年度の研究の方向について、発表した。
・可児郡教育研究所だより「朝霧」で共和中学校の実践を報告した。
＊　継続校において、研究成果の普及活動の成果（他校への反響等）など。
・共和中学校の実践について、可児郡の他の学校へ、郡教育研究会や研究所だよりによって着実に普及できた。
・他の学校からメールで、研究の内容を詳しく知らせて欲しいという問い合わせが来た。
・今年度の公表会後の感想から、生徒の学習姿勢や、教師の指導援助、指導計画などについて成果を示す記述が多数見られた。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校

【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
☑７～９学級　□１０～１２学級
□１３～１５学級　□１６学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導
☑その他

【研究教科】　☑国語　☑社会　☑数学　☑理科
☑外国語　☑音楽　☑美術　☑技術・家庭
☑保健体育　☑その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　□無